

【研究ノート】

保育士の専門性と養成の課題

大嶋 恭二*

Research Note

Specialty of Child Care Workers (Hoikushi) of Day Nurseries and the Problem of Present Training System

OSIMA Kyoji

The purpose of this research is try to verify whether the present system for training of the child care worker of day nursery functions well or not.

The method of this research is the followings. One is the use of questionnaires for child welfare institutions, and the other is listening to the ideas or the points of view of people with academic background and others in the today's system of training child care workers of day nursery.

The results of these investigations are as follows.

- 1) The necessity of enhancement of training curriculum for child care workers of day nurseries in school are “developmental psychology”, “theory of family support”, “social work” and so on.
- 2) It is better to get the qualification for child care workers of day nursery in four years than in two years.
- 3) It is necessary that a system which enables those who have been trained for 2 years to step up their qualification as that of 4 years.
- 4) It is better that the qualification for child care workers of day nurseries should be a general rather than separate qualifications for each age groups and each field, for example.
- 5) It is necessary to impose a national examination in addition to the graduation from the training school to secure child care workers' (of day nurseries) specialty.
- 6) The present examination system to acquire child care worker of day nursery's qualification should be continued under the condition of the imposition of the practice and so on.

キーワード：保育士の専門性、保育士資格、保育士養成、保育士試験

Keywords：Specialty of child care workers (hoikushi) of day nurseries、Qualification for child care worker of day nursery、Training of the child care workers of day nurseries、Examination to get the qualification for the child care worker of day nursery

* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

1 専門職としての保育士

1. 保育士資格の法定化

我が国の平成17（2005）年10月1日現在の社会福祉施設従事者の総数1,219,301人のうちの489,803人（40.2%）が児童福祉施設で働いている。この児童福祉施設従事者のうち278,073人が保育所における保育士であり、社会福祉施設で働いている従事者総数の実に5分の1以上（22.8%）を占めている。このような児童福祉施設の働き手の中心である保育士の資格が、平成13（2001）年11月の児童福祉法の改正（平成15年11月施行）で法定化（国家資格化）された。

そもそも国家資格とは、国会での審議に基づき制定された「法律」によって位置づけられているものであり、「保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいうものとする」と（18条の4）と定義している。すなわち、保育士とは、保育士の名称を使用して児童の保育及び保育に関して保護者の指導を行うことを業とする者であって、保育士登録簿に登録をした者となっている。また、同法では保育士としての信用失墜行為の禁止、守秘義務、保育士資格所有者以外の者が保育士の名称の使用禁止（名称独占）並びに罰則規定などを明確に示している。

法施行前の保育士資格は、昭和23（1948）年の児童福祉法施行令第13条において、「児童福祉施設において、児童の保育に従事する者を保育士といい、厚生労働大臣の指定する保育士を養成する学校その他の施設を卒業した者、保育士試験に合格した者をもってこれに充てる」とし、児童福祉施設で保育士としての業務を行うことを認めている任用資格であり長い歴史を持っていた。

社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士等が続いて国家資格化された保育士は、専門職として、利用者をはじめ社会から認知を受けるた

めには、多様な保育ニーズに応える質の高いサービスを提供できる専門性の確保が必須のことである。近年の少子化傾向の中での児童の社会性育成の機会の縮小、児童虐待の増加に典型的に見られる家族の養育機能の脆弱化など、児童・家族問題の多様化、複雑化に対応できる力量が保育士に要請される。保育士の職務の独自性として、「児童の生活に直接関わり援助しながら、個々の児童の発達を支援する」^{（注1）}ことがあげられるが、この児童の保育・養護に加えて、保護者への保育に関する指導、すなわち親、家族に対する相談援助や、地域社会の中での子育て支援が保育士の職務として要請されるにいたっている。保育所を中心とした多くの児童福祉施設の中で、保育士という職務が、児童・家族を、そして地域をより身近に捉えて総合的に家族支援ができる可能性のあることを踏まえていることである。

2. 専門職と専門性

保育士資格が法定化され専門職としての専門性がますます強く要求されるようになった。一般的に専門職という場合、その分野、領域あるいは事柄を専門に研究し、深く精通しているものをもって、いわゆる専門性を備え、それでも自分の業としているものであると思われるが、社会福祉専門職（保育士も含まれる）として成立するための条件として、複数の研究者によって主として1970年代、80年代にいくつかの概念が紹介され、検討され、今日に至っていると思われる^{（注2）}。保育士としての専門職を構成する要素として、①体系的な理論と技術、②体系的な養成課程と現任訓練、③専門職としての組織化、④倫理綱領、⑤テストか学歴による社会的承認等があげられる。これを保育士についてみると、全国保育士会としては、構成要素の一つである倫理綱領について、平成15（2003）年3月、「全国保育士会倫理綱領」を発表している。その倫理綱領の8番目は、「私たちは、研修や自己研鑽を通して、常に自らの人間性と専門性の向上に努め、専門職としての責務

を果たします。」となっている。また同じく専門職構成要素としての保育士の組織化（「全国保育士会」）もなされており、「テストか学歴による社会的承認」についても一応は整備されている。「体系的な養成課程と現任訓練」をみると、養成課程については、保育士を養成する学校その他の施設におけるカリキュラムは、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知により示され、全国的に統一した課程を修めたものが取得できる資格を得ることができるようになっており、時代や社会の保育・福祉のニーズに伴って常に見直しが必要とされるものであることが前提とはなっている、各種児童福祉施設において子どもの保育と保護者等への支援を行う保育士の専門的養成カリキュラムとして十分とはいえなくても一応の体系化がなされている。一方、「体系的な現任訓練」については、現在も課題として残されているといえよう。職場内、職場外を含めて研修の機会が保障され、学びへの積極的な取り組みが今こそ求められている。

また、社会福祉専門職の職業的専門性の構造について、京極高宣は、三点（三角形）に整理している。三角形の一番下に来るもの、基底には「基礎知識（一般教養・関連知識）」があげられている。いわゆる福祉的実践の担い手にまず要請されるのは、専門家として、その個人の幅広い、豊かな人間性である。二番目（二段目）に「専門的知識（社会福祉の理論、対象者理解、各種社会福祉制度等に関する知識）」と「専門的技術（社会福祉援助技術、施設援助の方法・技術等）」の二つがあり、それらの上（一番上）に「倫理（守秘義務等人権擁護や自立支援の視座）」があるとしている。^(注3)

社会福祉の分野における専門職、専門性の構造についての見方であるが、保育士においてもこれらの原則は基本的には同じである。

以上のような専門職としての保育士がその専門性を維持し、向上させるための課題、特に保育士養成の課題について、調査研究をもとに検討する。

(注1)『保育士養成資料集 第31号』 社団法人全国保育士養成協議会 2000年10月 71頁

本書は、現行の保育士資格の法令上の位置づけについての詳細な研究であり、社団法人全国保育士養成協議会専門委員会の平成12年度研究『保育士養成課程と関連する専門職養成課程の比較研究』の収録である。

(注2) 大嶋恭二「第Ⅵ章 児童福祉を支える人々」
吉澤英子・滝口桂子編著『児童福祉論』樹村房 1990年 92～95頁

ア) 1957年、E. グリーンウッドは専門職を構成する要素として、①理論の体系的実態-----内的に首尾一貫した体系として組み立てられた知識の蓄積、②専門権威-----専門分野における優越性の賦与、③コミュニティの承認-----専門職に賦与される特権の承認、④規制的な倫理綱領、⑤専門的文化-----専門職集団内における社会的諸価値、行動規範、専門職業集団の象徴など、を挙げている。出典：E. グリーンウッド著、高沢武司訳「専門職業の特質」『社会福祉専門職とは何か』鉄道弘済会 1972年 181～195頁

イ) 1964年、G. ミラーソンは、「専門職とは主観的にも、客観的にも、相応の職業上の地位を認められ、一定の研究領域を持ち、専門的な訓練と教育とを経て、固有の職務を行う、比較的地位が高い、非肉体的職務に属する職業をいう」とし、その構成要素として、①専門職は理論に基づいた技術を持つ、②その技術を得るには、訓練と教育が必要である、③専門職となるためにはテストをパスして能力を示さねばならない、④行動綱領を守ることで統一性が維持される、⑤そのサービスがは公衆の福祉につらなる、⑥その職が組織化されている、を挙げている。出典：「従事者職務の専門性について」『民間社会福祉事業従事者の専門性』 東京都社会福祉協議会 1967年 64頁

ウ) 秋山智久は、A. フレックスナー、E. グリーンウッド、G. ミラーソン、石村善助の概念を比較検討し、社会福祉専門職の条件として、①体系的な理論、②伝達可能な技術、③公共の関心と福祉という目的、④専門職の組織化（専門職団体）、⑤倫理綱領、⑥テストか学歴に基づく社会的承認を挙げている。出典：秋山智久「社会福祉専門職と準専門職」『明日の福祉⑨福祉のマンパワー』 中央法規出版 1988年 87～88頁

エ) 1915年A. フレックスナー 専門職業の七つ

の基準

①専門職業者の集団に属する人々は、常規的・機械的routine-mechanicalなものでなく、知的な過程にたずさわるものであり、またかかる知的な仕事をなす際に、個人的責任を負うものである。②専門職業集団は、その素材を、科学と学問から引き出し、伝統や、日常のありふれた経験に頼ることをしない。③これらの科学的資料は、実際目的の達成のために適用される。④それは専門職業集団によって、教育的に他に伝達し得る内容と技術とを発達させる。⑤専門職業は科学的資料の体系と、これに対する批判的、及び分析的文献を発達させる。⑥専門職業者は、相互の団結を図り、階級意識をもって承認された倫理的諸基準の保持、方法の批判、及び社会的並びに専門職業的結社をつくることによって、自己の専門職業的利益の向上をも企図する。⑦専門職業集団は、公共の利害に関する問題によって影響を受けるものであることを自覚する。
出典：竹内愛二『専門社会事業研究』弘文堂 1959年 40～41頁 A、フレックスナー1915年の講演『ソーシャルワークは専門職か』

オ) 石村善助の定義

「プロフェッションとは、学識（科学または高度の知識）に裏づけられ、それ自身一定基礎理論をもった特殊な技能を、教育または訓練によって習得し、それに基づいて不特定多数の市民の中から任意に呈示された個々の依頼者の具体的な要求に応じて、具体的奉仕活動を行い、よって社会全体の利益のために尽くす職業である」
出典：秋山智久「社会福祉専門職と準専門職」『明日の福祉⑨福祉のマンパワー』中央法規出版 1988年 87～88頁

(注3) 京極高宣「社会福祉の専門性について」『月刊福祉1987年8月号』全国社会福祉協議会 1987年 44頁

2 保育士養成の現状と課題

今日の保育・福祉ニーズの多様化など、児童を取り巻く環境の変化を背景に、保育士に求められる役割が増大し、また関係機関との連携の必要性も高まっている。保育士は、共働き世帯の増加や家庭、地域における児童の養育力の低下による多様な保育ニーズへの対応のほか、子

育て家庭への支援、児童虐待による被虐待児や発達障害児への対応、さらには、保育と教育を一体とした総合施設（認定こども園）の制度化に伴う幼稚園教諭との連携など、その専門性に大きな期待が寄せられている。このようなことから、その社会的要請に応えるべく、多様な専門性や資質を備える保育士を養成するため、現在は幼稚園教諭免許とは異なって単一資格となっている保育士資格そのもの、及び現行の2年間を基本とする修業年限及びカリキュラム等の養成課程のあり方、また保育士を養成する施設（学校）の施設・設備すなわち、教員の研究室、図書館（図書室）、実習室等の学習環境のあり方等の検討が必要とされるに至っている。ここでは、このような問題意識に基づき保育士の質及び専門性の向上を図る観点から、筆者を主任研究者として、平成17（2005）年度には「保育士養成施設の教育環境に関する調査研究」、平成18（2006）年度から平成20（2008）年度にかけては「保育サービスの質に関する調査研究」を実施している。

本稿では以上の二つの研究、特に、平成18（2006）年度から3カ年計画で実施している「保育サービスの質に関する調査研究」のうちの平成18（2006）年度の研究結果（一部平成19（2007）年度）を中心にして、保育士養成の課題について論究する。

I 調査の指摘する養成上の課題

まず、平成18（2006）年度は、保育所や児童養護施設や障害関係施設などの保育士が勤務している社会福祉施設現場に対してアンケート調査と、アンケート調査と同じ項目を保育、福祉施設関係者及び学識経験者等の有識者に対するヒアリング調査をしたものである。

アンケート調査は、保育実習を受け入れることのできる16種類、3,042施設に対し質問紙を郵送した結果、1,182票の有効回答を得、回収率は38.9%であった。

また、ヒアリング調査は、保育士資格と保育

士養成課程のあり方について、質問紙によるアンケート調査で尋ねた内容について、より詳細な意見を得るために、またそれらの意見の背景を明らかにすることをとおして調査研究の精度を高めることを目的に、児童福祉、保育士養成に造詣の深い学識経験者及び、児童福祉の現場で実践及び研究を重ねている施設長等の有識者14名の合計18名に対して行った。

平成19（2007）年度は、全国の指定保育士養成施設（養成校）で、社団法人全国保育士養成協議会加盟している436校に対して、施設調査と同様の内容でアンケート調査を実施し、回収率は273校62.6%であった。

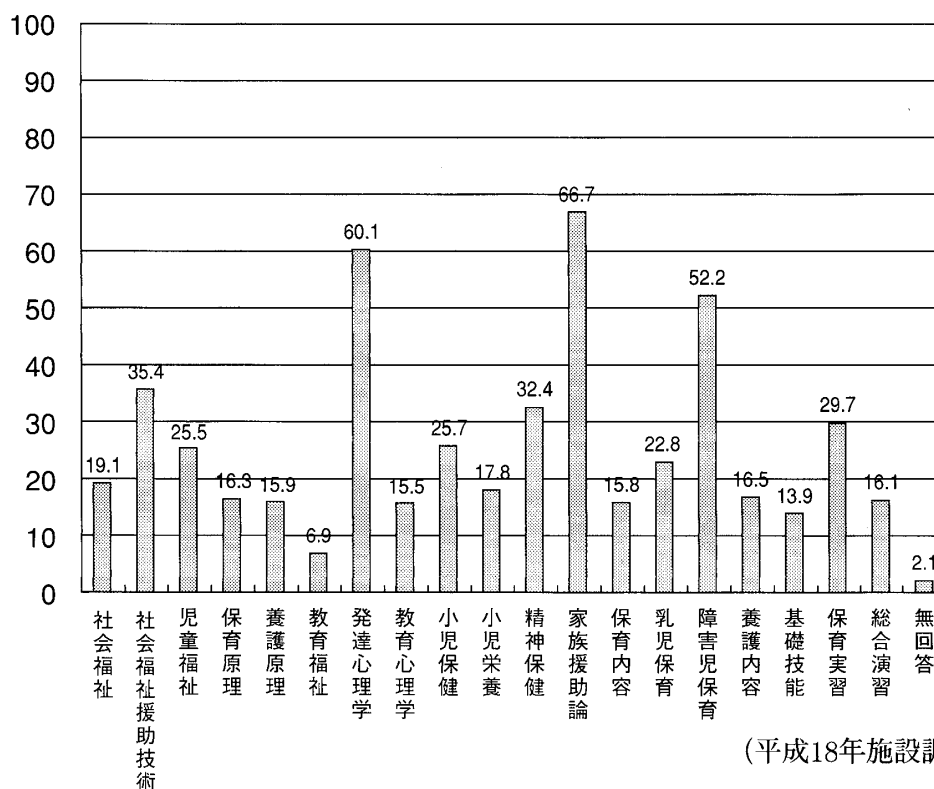
1. 児童福祉の現場が充実を求めている教科目

現行の保育士養成課程における必修科目のうち、今後、さらに充実することが必要とされる科目は、「家族援助論」、「発達心理学」、「障害児保育」、「社会福祉援助技術」、「精神保健」等であった。特に「身につけるところまで教え切れていない」という社会福祉援助技術、「保育

を通した親への保育指導という観点」からの子育て支援のための視点と技術、発達障害者支援法（平成17年4月施行）に伴う障害児、また、被虐待児など気になる子どもへのへの対応、病児保育などにかかわる教科目への期待は、今日の保育・福祉現場の利用者とその人達に対する支援を行っている児童福祉施設の実態を反映している。と同時に、今日の児童福祉現場に求められている専門性ともいえる。児童・家族の抱える問題は複雑・多様化し、虐待の増加等につながっており、その対応のために、保育士には一層の専門性の向上が求められている。

平成13年の児童福祉法の一部改正（施行は平成15年）年により、保育士を国家資格として位置づけ、その業務として「子どもへの保育」と共に「保護者への保育指導」を規定した。いわゆる従来の子どもへの保育に加えて、親への支援というソーシャルワークの機能を保育士に課した。子どもへの保育だけでも高い専門性が求められている上に、親への支援という、社会福祉の領域における専門職である社会福祉士的

今後さらに充実が必要な科目



役割、機能が期待されるなど、一層の専門性が求められている。このような社会状況を背景に、調査は、保育士養成における今後の課題として、保護者を支援するための専門性と、障害児及び被虐待児など気になる子どもなど、多様なニーズに対応できる力の向上が求められていることを示唆している。このことは、一方で現行の保育士養成課程が、このようなニーズに応える専門性のための基礎を養成仕切れていないことの表れでもあろう。ヒアリングでの「保育士としての専門的な支援、保護者支援ということで、保育指導原理・保育指導技術論・保育指導技術演習という科目を、新たに作り必修とする」などの意見が典型である。

2. 国家試験の導入について

社会福祉士・精神保健福祉士・看護師等の国家資格は、養成校で定められた単位を履修した後に、国家試験を受験し、これに合格することによって資格・免許を取得することができる。一方で保育士については、養成校で定められた単位を履修して養成校を卒業すると保育士資格を取得することができる。保育士資格取得のために、養成校の卒業に加えて国家試験を課すことについての児童福祉現場側の反応は、「必要最低限レベルを確認する程度の国家試験を課す」と「難易度の高い国家試験を課す」で70%以上を占めており、試験を課すことに肯定的であった。またヒアリング結果も同様の傾向であり、「保育士に対する社会的信頼・評価を高める」、「保育士としての最低限の水準を確保する」など国家試験の導入に賛成する意見が大勢を占めており、保育士の専門性の向上を強く求めているものであった。特に近年の保育士養成校への入学が、地域、養成校によっては、かなり入りやすくなっている中で、養成校を卒業することで保育士資格を取得することが、保育士の専門性を一定の水準で維持、あるいは担保できるかという現実的な懸念を反映している側面も考えられる。一方では国家試験の導入には「ペーパーテストでは保育士としての資質は

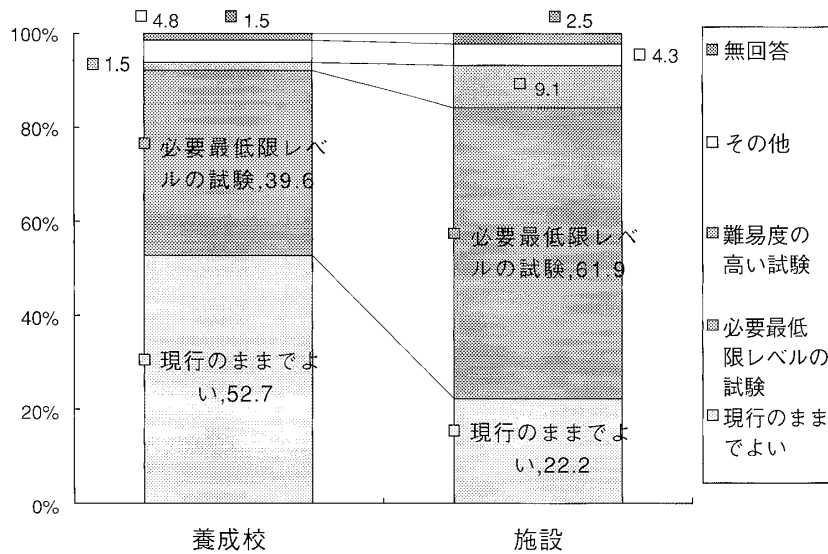
測れない」等の反対意見もみられた。

ここで興味深いのは、同研究の平成19（2007）年度版で、保育士を養成する施設（養成校）に、全く同じ項目でアンケートを行ったが、現場サイドに比して、国家試験を課すことに否定的であった。すなわち、「必要最低限レベルの試験」「難易度の高い試験」を合わせ、なんらかの試験を課すことを求めているものは、施設では7割以上となっているのに対して養成校では約4割であり、養成校の約5割は「現行のままでよい」としている。また、これを、学校種別にみると、「現行のまま国家試験無し」という意見は、高い順に「各種・専修学校」「短期大学」「四年制大学」の順となっている。このような傾向をどう見るかについては、単に養成校の学校経営等の事情によるのか、その他の要因が考えられるのか等は、今後の養成校教員に対するヒアリングの結果等を踏まえての検討が必要であることを示している。

また、今ここで、保育士資格取得のために、保育士養成校卒業に加えて国家試験を課すことについての調査結果をみたが、保育士になるための資格取得の方法の一つが、指定保育士養成施設（保育士養成校）を卒業することであり、社会福祉領域における他の専門職、例えば、社会福祉士や精神保健福祉士のように養成校を卒業後、国家試験を受け、合格した者がその資格を得るというものになっていない。このことは一方で、養成施設が専門職に相応しい教育をすることを要請されていることでもあり、保育士になることを希望する学生に対して、講義・演習や実習等に対応できるだけの態勢が、いわゆる教員の数や質、学校の施設設備等の教育環境が整っていることが前提となっている。

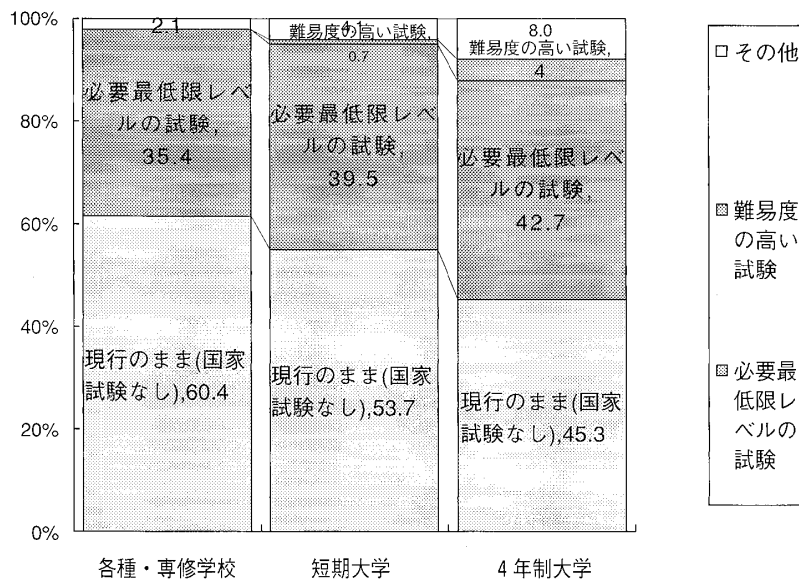
1948（昭和23）年の制度発足以来半世紀以上にわたって続いている指定保育士養成施設の教育環境については、国（厚生労働省）による幾たびかの通知による変遷を経て今日に至っているが、一方で、平成16年度の総務省の管区行政評価局による「保健福祉・食品衛生関係養成施設の指導監督に関する行政評価・監視」に

1.国家試験を課すことについて（養成校/施設）



（平成18年施設・19年養成校調査）

1-2.資格に国家試験を課すことについて（養成校）



（平成18年施設・19年養成校調査）

よる評価・監視の結果では、保育士養成施設が指定基準を守っていない例が見られるとし、厚生労働省の各地方厚生局に対して、養成校を指導するような所見が出されている。

専門職養成に相応しい教育環境とは、またその基底となる保育士養成施設の指定基準は如何にあるべきかがあらためて問われていることから、平成17年（2005）年度に「保育士養成施

設の教育環境に関する調査研究」を行った。

この研究をとおして印象的なことは、専門職として相応しい保育士養成の教育環境の水準、またそのことを規定する指定基準のあり方そのものが、現在のものでいいのかという率直な疑問であった。いうまでもなく、すべての養成校が、保育士養成にあたっては、国（厚生労働省）の示す指定基準をクリアしているからこそ、指

定保育士養成施設としての認可を受けている。しかしながら実態は、各種別（大学・短期大学、専修学校等）養成施設（養成校）によってかなりの差があり、「保育士」となる基礎資格を得るという視点からみたとき、同じ保育士であっても、入学した施設（養成校）によって、その学びの幅、深さに大きな差がみられるということであった。なかでも学びの基本となる「図書に関係する環境」や、より質の高い教育、指導をするためには必須の条件である教員の研究室の確保等の面での差の大きさであった。学生は結果的にはどの養成施設であっても「保育士となる資格を取得する」ことができることから、児童の保育とともに親への保育指導を含めた国家資格を有する専門職としての一定の水準を保つための指定基準のあり方が、今一度検討されなければならないことと同時に、保育士の専門性を一定水準に保つためのシステム等の構築の必要性を強く感じた。

3 保育士資格の性格について

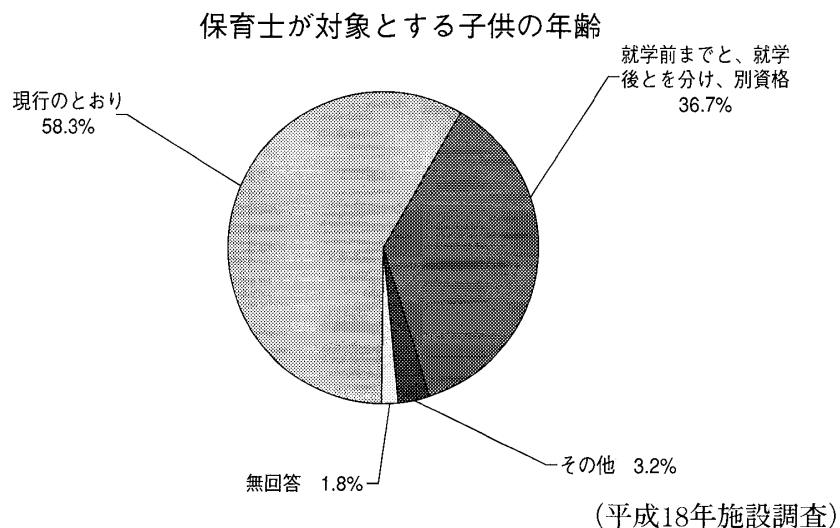
現行の保育士資格は、保育所を含めた幅広い児童福祉施設全般を対象とし、子どもの保育と保護者への支援を行う資格という位置づけとなっている。このような保育士の基本的性格についての捉え方を、調査から探してみる。

① 保育士が対象とする児童の年齢の範囲

現場に対するアンケート調査では、保育士が対象とする年齢については、「現行通り0歳～18歳未満を対象とする」が約6割、「0歳～小学校就学前までと就学後から18歳未満とに分けて、別の資格とする」が4割弱となっていた。有識者、学識経験者のヒアリングでも同様の傾向であり、4割弱が別の資格とする見解は、認定こども園の創設等とも関係しているのかもしれない。現行の0歳から18歳未満までとする理由として、「子どもの発達は様々であること、保護者の相談、支援ができるという意味でも、就学までの資格では説明がつかない」、「基本は0歳から17歳までであり、それを見据えた上で専門分化していく」などが典型である。一方で、認定こども園の発足を契機として、「0歳～就学前までと、就学後から18歳未満までとを分けて、別の資格とする」という考え方が、特に幼稚園教諭との関連で主張されている。

② 領域別資格の必要性

保育士資格を現行の通り一本化した資格とするか、あるいは領域別に分けた資格とするかについては、アンケート調査では、「現行のとおりで、保育士資格はすべての児童を対象とした資格とする」が6割5分で、「保育士資格を領域別（保育・障害・医療・虐待・家庭支援など）に分けた複数の資格とするの約3割を上回っていた。



保育士資格を総合的なものとするか領域別なものにするかについては、基礎となるものは年齢別や領域別に分けずに一本化して総合的な保育士資格としておき、それに上乗せした部分は領域別にしていくという点に集約されるようである。ただ、領域別に分ける理由として、保育所で働く保育士と児童養護施設等で働く保育士とでは、対象の年齢を主要な要因として、異なる専門性が求められるとするものである。ただ、厚生労働省の児童養護施設等のあり方を考える社会的養護の検討委員会では、被虐待児童等に対応できる専門職員の養成が要望として出されている。保育士は児童福祉施設最低基準により、児童養護施設等に職員として配置されているが、受け入れ先である当の児童養護施設などの現場からの要請にいかに対応していくかが問われている。

このような保育士の基本的性格については、養成校も同様の結果を示していた。

4 保育士養成年限等について

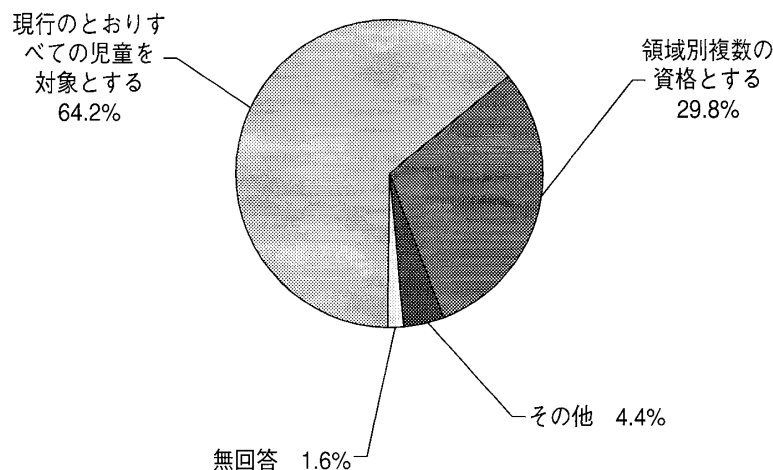
(1) 保育士の養成年限

現行の保育士資格は、二年間養成を基盤とする単一資格となっているが、18年度の施設に対する調査では、「幼稚園教諭免許のように二種（短期大学等）・一種（大学等）・専修（大

学院等）のような資格とする」が4割強、「現行の二年間養成課程を基盤とする単一資格でよい」とするもの約3割、「すべて四年間養成課程の資格に移行する」が約2割であった。四年間による養成が6割強占めるという結果は、保育士を受け入れる現場側の置かれている今日状況物語っている。特に先の保育士を領域別に特化するところでも指摘されていたように、児童養護施設等の職員の基本的な資格として、現行の二年間養成では十分に答えることができないことを表している。「二年の基礎資格の上に上乗せの一年で分野別、領域別を学ぶ」、あるいは、「幼稚園に合わせて、一種、二種、専修としていく」などというヒヤリングでも、現行の二年間養成に加えて四年間の養成を創設するという意見が多くみられた。今後の保育士の養成における課題の一つが示されているが、一方で、現行の二年間養成課程の単一資格でよいとする意見が3割弱あることにも留意しなければならない。

現場側のこのような、意見に対して、養成校側がどのように考えているかについて平成19年度の調査で見ると、やはり、「二種・一種・専修」と養成年限の異なる資格とするという意見が多く、これを学校種別にみると、四年制大学で「現行の二年間養成課程の単一資格とす

領域別資格の是非

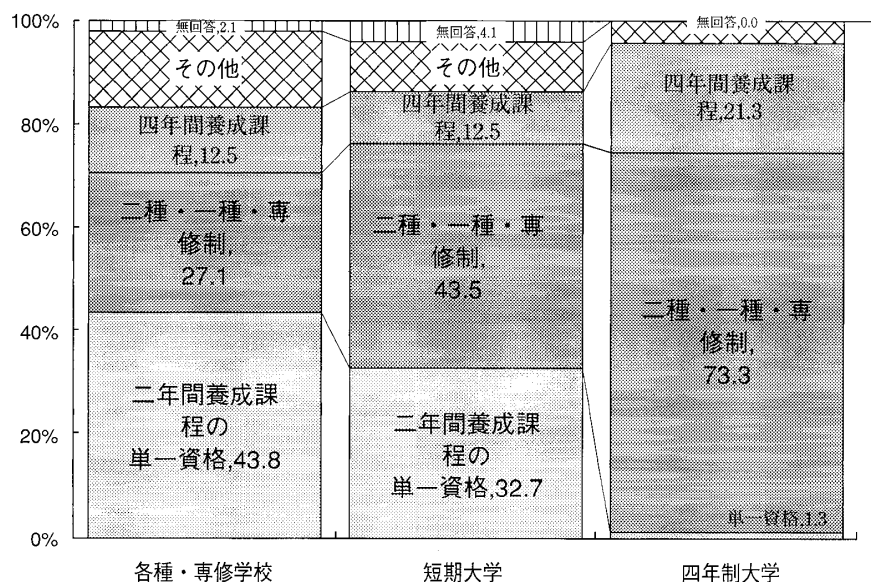


(平成18年施設調査)

る」という意見は低く、各種・専修学校は「二種・一種・専修制」とするという意見が低かった。

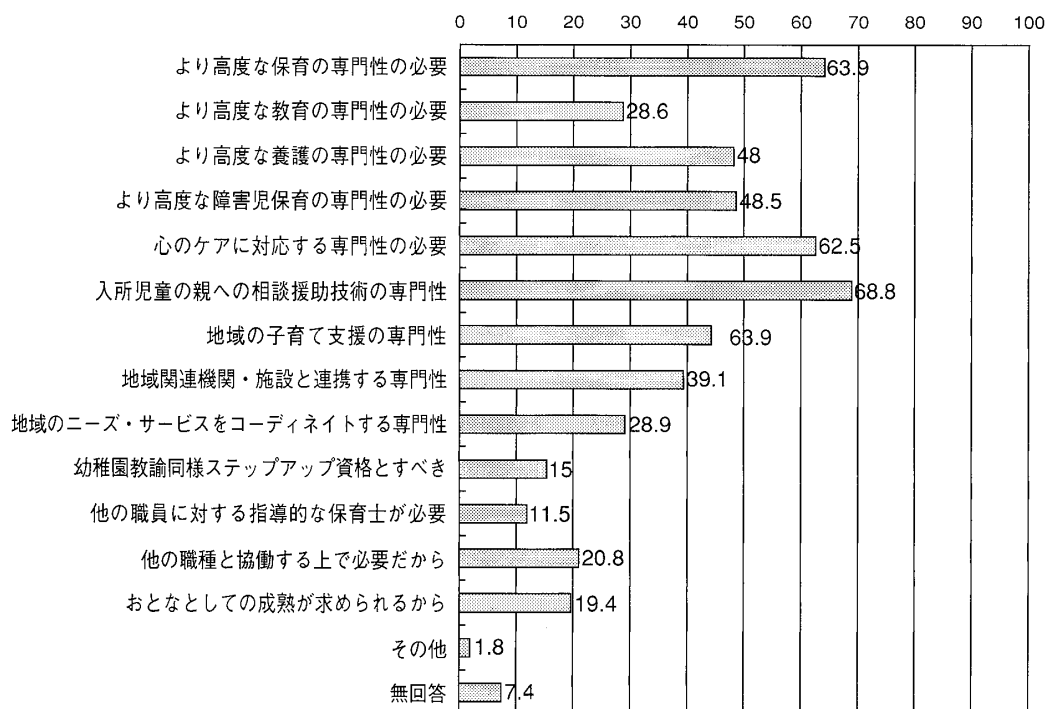
(2) 四年制養成課程の資格が必要とする理由
前項において「幼稚園教諭免許のように二種（短期大学等）・一種（大学等）・専修（大学

1-2.保育士養成年限について（養成校）



（平成18年施設・19年養成校調査）

四年制養成課程が必要と考える理由



（平成18年施設調査）

院等)のような資格とする」、「すべて四年間養成課程の資格に移行する」と答えたものに対し、四年間養成課程が必要だと回答した理由を尋ねたのが以下の図である。

ここに表れているのは、入所児童の親への対応力、保育・養護のより高度な専門性や障害児・被虐待児に対応できる専門性、また、地域での子育て支援力等であるが、今日の児童福祉施設現場が、このような多岐にわたる専門性の確保を保育士に求めていることがわかる。

なお、本稿では集計結果を示していないが、これを施設種別にみると、保育所は、保育の専門性を高めることと、親への相談援助技術を高めることを求めている、養護系施設は、心のケア、入所児童の親への対応の専門性を求めている。また、障害児系施設は、より高度な障害児保育の専門性を求めている。

(3) ステップアップの仕組みの必要性

仮に四年間養成課程の資格を新設するとした場合、二年間養成課程の保育士資格を有して現場で働く者が、一定の現場経験の後に四年間養成課程の資格を取得することができるようなス

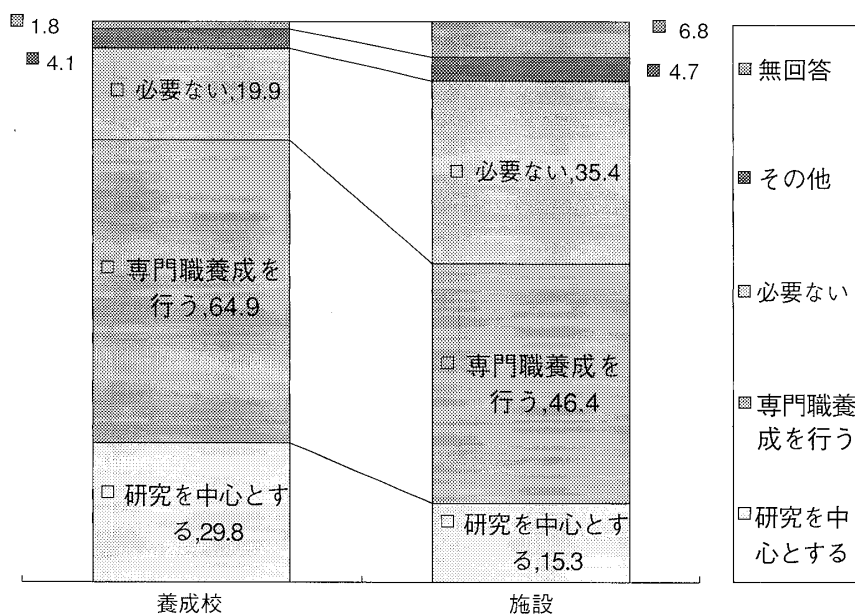
テップアップの仕組みの必要性については、現場側(平成18年度)で8割以上、養成校側(平成19年度)で9割以上を示しており、3年間、4年間というような保育士養成の仕組みにしたとしても、現行の二年間で資格を取得した者に対するステップアップの仕組みを作ることは必須のものと思われる。

(4) 大学院における保育士養成

今日の児童福祉現場で働く保育士に、子どもの保育と保護者への支援という役割、業務が法的に課せられており、より高い専門性の必要性が繰り返し指摘されている中、一方で、その養成は2年間という短期大学レベルでの養成課程となっている。四年間による養成に加えて大学院による保育士養成の必要性について尋ねた。アンケート調査結果では、18年度の施設調査では、「専門職大学院での保育士養成が必要」が4割強、「大学院による保育士養成は必要ない」が3割5分、「研究を中心とする大学院での保育士養成が必要」が1割5分となっている。大学院が必要という意見は、合わせて6割を越えている。また、研究を中心とする大学院よりも、

4. 大学院での保育士養成について(養成校/施設)

*複数回答



(平成18年施設・19年養成校調査)

専門職養成を行う大学院の割合が高く、現職者の専門性向上の機会が求められていることが分かる。

一方、平成19年度の養成校調査では、「大学院による保育士養成は必要ない」が約2割で、必要とする意見が大勢を占めている。

18年度のヒアリング調査でも、大学院までを視野に入れた意見が多く、「大学院での養成も、特に高度専門職大学院の領域で大事」という意見や、「いずれ保育学博士を創らなければならないが、その時には幼保が一緒になっての保育学博士が必要」という意見もみられた。

今日の専門職としての保育士養成の課題の一つが、この大学院による教育の制度化であることを裏付ける結果となっている。

5 保育士資格と他資格との関係について

今日、保育士には家庭や地域への支援が必要とされるようになってきている。また保育所と幼稚園が一体となった認定こども園も発足している。このような動向の中で、今後の保育士と近接領域の他資格・免許との関係については以下のとおりである。

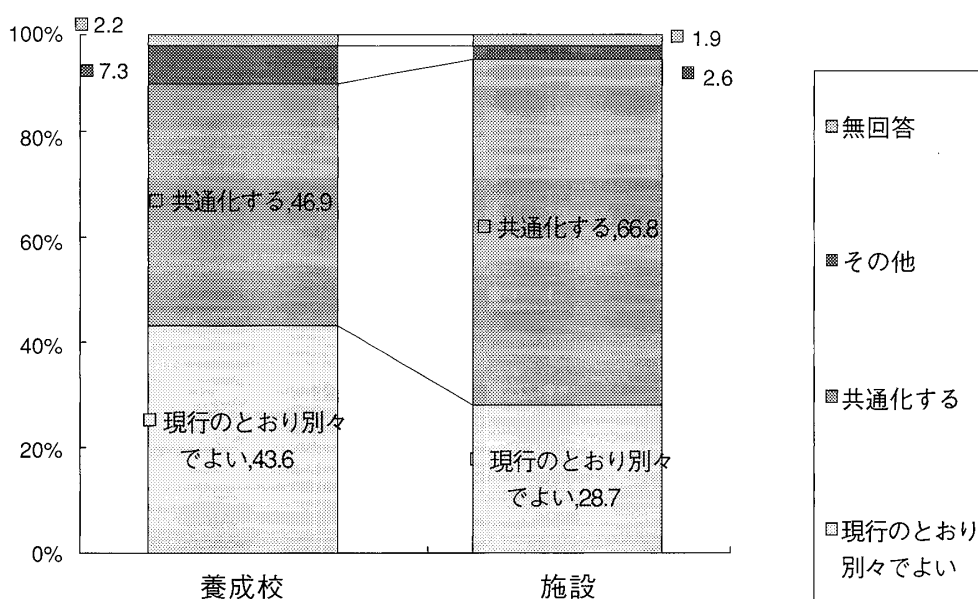
(1) 二種幼稚園教諭免許との関連づけ

まず、保育士資格と二種幼稚園教諭免許との関連づけについては、18年度の施設のアンケート調査では、「今後は共通化（一本化）する」66.8%、「現行通り別々の資格・免許のままでよい」が28.7%であった。

また、19年度の養成校調査では、「今後は共通化（一本化）する」46.9%、「現行通り別々の資格・免許のままでよい」が43.6%と、共通化するが、現場と比べて20ポイントもの差がみられた。

養成校におけるこの結果は、続いて行われた養成校教員のヒアリングの結果の分析に待つことになるが、18年度のヒアリング結果では、保育士資格と二種幼稚園教諭免許との関連づけを検討するためには、その前提として、未整理のままである保育士の専門性や対象範囲、児童指導員等を含む近接領域の資格との総合的な関係の確認などの必要性が指摘されていた。ただ、共通化を肯定する意見として、「将来的には一つの資格になることが望ましい。教育機能を持ち、地域や家庭を支援するセンターで働く総合的な職種にすべき」などというように、保育

1. 保育士資格と、幼稚園教諭二種免許の関連（養成校/施設）



(平成18年施設・19年養成校調査)

所と幼稚園が一体化した認定子ども園の発足を背景にしていることが窺える。また共通化しないで、現行のまま別々の資格とするという意見の代表的なものは、「保育士の方が保育者養成という点では良くできている。幼稚園の方は、小中高の教員養成の並びの中で、学校教育という位置付けの中であり、科目の建て方が学校教育体系の中でできている。保育士は保育士だけに特化して創られている」である。

いずれにしても、保育士資格と幼稚園教諭の関連だけをとりあげて方向付けることができる課題ではなく、他の近接領域の資格も含めて、保育士資格の性格（総合的なものとするか、領域に特化したものとするかなど）、対象とする年齢、養成年限、資格の段階化、ステップアップの仕組み等を整理した上で、総合的に検討しなければならない課題であることを示している。

(2) 介護福祉士との関連づけ

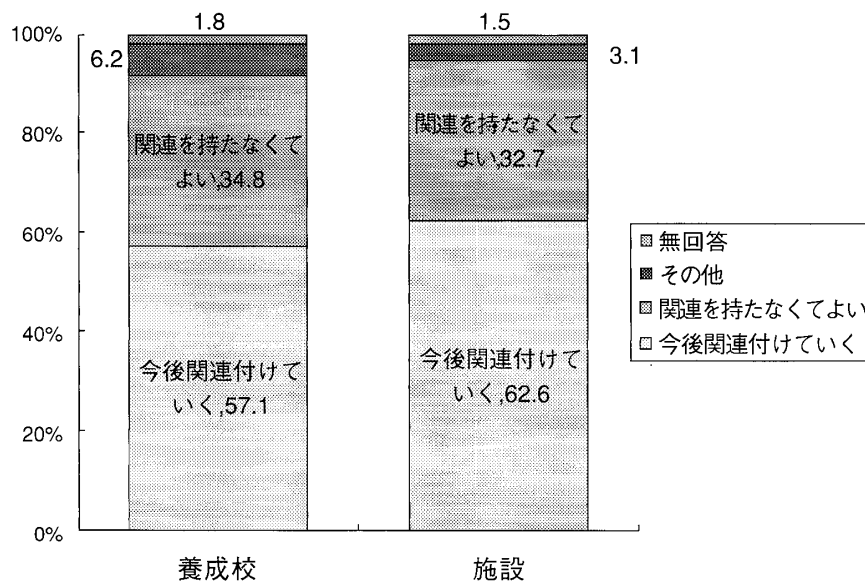
現在、保育士資格を有する者は、1年間の介護福祉士養成課程で介護福祉士資格を取得できるが、この介護福祉士と保育士資格関連については、18年度現場のアンケート調査結果は、

「現行のとおり継続」が約7割、「介護福祉士資格と関連を持たなくて良い」が約3割であった。同じく18年度のヒアリング結果からも、「特に反対はしない」、「そのような道があるなら残しておく」、「関連すればそれに超したことはない」、「ケアという意味での本質は同じでできなくはない」というような、どちらかといえば消極的な継続といった意見が多く見られた。

(3) 社会福祉士資格との関連づけ

現行では、保育士資格と社会福祉士資格については特に関連づけがないが、今後、保育士と社会福祉士との関連づけを図るべきかどうかについては、アンケート調査結果は、「今後、社会福祉士資格と関連づけていく」が「社会福祉士資格と関連を持たなくて良い」を上回っている。18年度のヒアリング結果も、これと同様の傾向であり、保育士と社会福祉士との関連づけを必要と認める意見や、積極的に関連づけを求める意見が見られた。特に、社会福祉士と保育士の両資格を持つことによって「より高い専門性と幅広い視野で利用者のニーズに応えることができる」、「リーダーとなる人材には保育士+社会福祉士も必要である」など、今日の保

3. 保育士資格と社会福祉士資格の関連 (養成校/施設)



(平成18年施設・19年養成校調査)

育士に求められている子どもの保育と親への支援という専門性を背景としていることがここでも伺われる。

6 保育士試験による資格取得について

保育士資格取得の方法には、養成校を卒業する方法と、保育士試験に合格する方法の二つがある。現行の保育士資格取得試験については、18・19年度のアンケート調査結果とも、「新たに条件をつけて行う」や「現行のまま資格取得試験を残す」という考えが、「保育士試験による資格取得は廃止する」を上回っている。新たに付加する条件の内容も、「実習を課す」、「実務経験を課す」などとなっていて、資格取得のために現行の保育士試験は残すべきとしながらも、実習、実務、スクーリング等を課す事を指摘している。これらの残すべきとの最大の理由は、ヒアリング結果で言われているように、「多様な人材確保のため」ということに集約されよう。

一方で、廃止するという意見もみられ、「保育士は他の人と協働して働くので、きちんと教育課程で他の学生と学ぶという要素が大事」、「通信制でもいいので学校で学ぶ」という意見がみられた。

7 その他、保育士課程全般について

アンケート調査結果の自由記述からは、保育士の仕事の重要性、保育士という職能への期待は、その背後にある「人」としてのあり方を問うものであり、感性・人間性・常識・知識等が求められていること、カリキュラムの見直し等が挙げられていた。

また、ヒアリング調査では、人間としてのあり方や、社会人としてのあり方、体験学習の重要性、現場と養成校との連携の重要性、など、多様な意見がみられた。また理念や倫理観を育てることの重要性、自ら考える力や哲学などについても、言及されている。

Ⅱ まとめと今後の課題

今日の社会的・時代的要請に応える専門性や資質を備える保育士を養成するため、保育士資格、及び保育士資格取得のための修業年限、カリキュラム等の養成課程のあり方等の検討の必要性が高まっている。本研究はこのような保育士の養成のあり方に関するもので、平成18(2006)年度は、保育士を受け入れる児童福祉施設に対するアンケート調査及び有識者、学識経験者等に対するヒアリング調査を行った。

アンケート調査は、16の施設種別、3,042ヶ所に対して行い、回収率は1,182ヶ所(38.9%)であり、ヒアリング調査は、児童福祉施設の有識者14名、学識経験者4名の18名について実施した。

また平成19(2007)年度は継続研究として、保育士養成校に対するアンケート調査(実施済み)と養成校教員へのヒアリング調査(実施中)をおこなっている。

これらの調査結果から、虐待や保護者の子育て支援等今日の保育士に求められる専門性を反映して、養成課程における発達心理学や家族援助論、社会福祉援助技術等の科目の充実の必要性、保育士資格を現行の2年間養成を基盤とする単一資格とするよりも、幼稚園教諭免許のように二種(短期大学等)・一種(大学等)・専修(大学院)のように段階化する、あるいは2年間養成を基礎資格としながら4年制にステップアップする、また年齢別・領域別に分けるよりも総合的な資格とする、さらには保育士としての専門性の一定水準の確保のために、養成校卒業に加えて国家試験を課すなど何らかの仕組みを作る必要性、「実習を課す」などの条件の下に現行の保育士試験の制度を継続する等々について積極的に評価している児童福祉施設現場及び現場の有識者、学識経験者の意向、考え方の一端を知ることができた。

ただ、養成校卒業に加えて新たに国家試験を課すことについては、児童福祉施設の現場側では70%以上が必要としているのに対して、養

成校側は約40%であり、30ポイント以上もの開きがある。より質の高い保育士を求めている現場側の要請に対して、保育士を養成し、現場に輩出する養成校が、現行のままでも十分に、今日の社会、時代のニーズに応えていると認識しているのだろうか。現在進行中のヒヤリングの結果を踏まえて、より精査する必要がある。

本研究をとおして、保育士資格が現行の2年間養成を基盤とする単一資格でいいのか、幼稚園教諭免許のように二種（短期大学等）・一種（大学等）・専修（大学院）のように段階化するのか、あるいは2年間養成を基礎資格とし、その上に4年間、大学院で専門性を深化、分化させていくのか、さらには保育士としての専門性の一定水準の確保のために、養成校卒業に加えて国家試験を課すのか、さらには、現行の保育士試験による資格取得のありかた等々について、今後さらに検討する必要性も明らかになった。

て、今後さらに検討する必要性も明らかになった。

平成19（2007）年度の、保育士養成施設（養成校）に対する同様の内容でのアンケート調査及び、養成校教員に対するヒアリング調査の結果をとおして、今日の社会・時代の要請する保育士及びその養成のあり方を検証したい。

なお、本稿は下記の「保育サービスの質に関する研究 平成18年度総括研究報告書」及び平成19年度に継続して実施中の本研究のアンケート調査の結果、平成17（2005）年度財団法人子ども未来財団委託研究「保育士養成施設の教育環境に関する調査研究」を基にして、加筆、修正を加え、私見を述べたものである。

（人間科学研究科 大嶋恭二）

1. 『平成18年度厚生労働科学研究費補助金による政策科学総合研究事業【政策科学推進研究事業】』

- ・研究課題名：「保育サービスの質に関する研究」
- ・研究期間：3年間（平成18年4月1日～平成21年3月31日）
- ・研究組織：【主任研究者】大嶋 恭二（東洋英和女学院大学）

【分担研究者】石井哲夫（社会福祉法人嬉泉）、大場幸夫（大妻女子大学）、小沼肇（静岡英和学院大学）、金子恵美（日本社会事業大学）、高野 陽（東洋英和女学院大学）、柴崎正行（大妻女子大学）、西村重稀（仁愛女子短期大学）、増田まゆみ（目白大学）

【研究協力者】金森三枝（東洋英和女学院大学）、守山 均（岡崎女子短期大学）、矢藤誠慈郎（新見公立短期大学）、石井章仁（東京家政大学（非常勤））、尾木まり（子どもの領域研究所）、高橋貴志（白百合女子大学）、西海聡子（宝仙学園短期大学）

2. 平成17（2005）年度財団法人子ども未来財団委託研究「保育士養成施設の教育環境に関する調査研究」

【主任研究者】大嶋 恭二（東洋英和女学院大学）

【研究協力者】石井哲夫（社会福祉法人嬉泉）、近藤洋子（玉川大学）、高野 陽（東洋英和女学院大学）、高橋貴志（白百合女子大学）、西海聡子（宝仙学園短期大学）、朴 涼香（鶴見大学短期大学部）、増田まゆみ（目白大学）、松本晴美（山梨学院短期大学）、水野則子（山形短期大学）、本山益子（岡崎女子短期大学）、守山 均（岡崎女子短期大学）